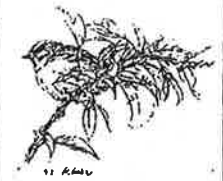


# 鳥城会報



〔母校からの報告〕

## お蔭様で図書館を整備

鳥取西高同校校長 山田 董

晩秋の候、渡辺会長様をはじめとして関東鳥城会の皆さまにおかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、戦後五十年に当たる今年には、年明けより大震災、社会的大事件が相次ぎ、まことに物情騒然とした年でありましたが、ここに一年間の報告をいたしたいと思います。

本県高校教育界におきましても、五十年に一度といわれる全国高等学校総合体育大会が鳥取県を主会場として、八月一日より開催されました。これは、昭和六十一年の「わかとり国体」に十年の「わかとり国体」につぐ十年振りの大きなスポーツの祭典でありました。全国各県から参加する三万人の役員、選手を暖かく迎えようと、生徒・職員は、

「一人一役」をスローガンにして取り組んでまいりました。本校においても、大会運営や集団演技などに生徒・職員ほぼ全員が参加、協力いたしました。選手の諸君も、陸上競技をはじめ、三十八名の生徒が出場いたしました。全国大会の壁は厚く、初突破がやっとといった状況でありました。その中で、新体操の五位入賞は、ジュニア養成の進んでいる県外の私立高校を

相手によく善戦し、堂々の成績でありました。連日の猛暑の中、選手・役員として、生徒はよく活躍し、六十万国民の期待に十分に応えてくれました。また、このインターハイに先立って行われた夏の高校野球県予選では、惜しくも初戦で敗退いたしました。が、明年度の創部百周年に向けて、選手・監督・関係者一同、また新たな意欲を燃やし、厳しい練習を続けております。

次に、学校創立百二十周年記念事業の一環として、ご協力いただきました図書館整備事業がお蔭をもちまして完了いたしました。コンピュータを導入して、蔵書の検索、県立図書館とのオンライン化など、県の

改修工事と相まって、すばらしい図書館が出来あがりました。これも関東鳥城会をはじめとする会員の皆さまの募金活動に拠るところでありまして、紙上をおかりしまして厚く御礼を申し上げます。会員の皆さまのご支援によって整備されました諸施設を活用し、後輩でありま

## 会の発展に西高勢の奮起を

局長 三浦三郎  
副局長 三浦三郎

な総会を開くことができました。来年は十一回卒業の皆様に総会の当番幹事をお願いすることにいたします。このように卒業年次ごとに総会の当番幹事をお願いし、多くの卒業生が集い、懇親を深め、母校西高の活躍の支えとなる会にしたいと思います。在京西高卒業生の皆様一人でも多く参加され、ご意見をたくさん頂戴することにより、有意義な会へ発展させることが出来ると思っております。

## 球 題 閑話

### 野球部百年に想う

一 中四〇回(昭和三年卒) 小 島 多 慶 用 力  
(元バ・リーグ審判技術部長)

(松江高)、浜田中(浜田高)、鳥根商業などが、鳥取県ではわが校のほか米子中(米東高)、倉吉中(倉吉東高)、鳥取二中(鳥東)

学時には七百四、五十校、現在は四千数百校(鳥取県内でも二十六校)となつて、中等野球、そして現高校野球への関心の深さを今更な

毎年予選敗退が嘆かれていた。そして、大正十三年「紅の旗ゆらめきて、たたかい

場で大正大会が催された。馬鹿でかい建物の中が球場であったのにも驚いたが、広さも野球規則書通りファウルグラウンドも十二分に

とってあった。もちろんボールボーイ等いない。各チームの補欠選手がバット等を取りに行く。場内アナウンス等ある筈がない。両軍メンバーの発表は看板に書いてたものを、球場係員が観客席前に持ち回って知らせたものだ。

この大会で、鳥取一中は竹内正実投手の好投あり、

たし、前年の無念を晴らし

た。九月には西日本大会での優勝が誇らしい思い出だが、十一月第三回明治神宮大会や翌昭和二年春の選抜に共に初出場出来たことも嬉しい回想である。

しかし、同年夏の甲子園大会三回戦で初出場の鹿兒島商業に無残に敗れた悔いは今に残る。飛田穂川先生に「勝ちに勝れる鳥取一中」と酷評されたが、これも甘んじて受ける外ない。満百才を輝かしく飾って欲しいと希うのは私だけではない。奮起を祈る。

母校野球部は来年十一月満百才を迎える。人生でも百才を上寿といつて、長寿最高の祝い事を行う。野球クラブでは有意義な行事を今春より計画中心と聞く。

明治十九年(一八九六年)校友会の組織として創設、三十九年から一時廃部となるも、四十二年に復活した。

大正四年、豊中球場で行われた第一回全国中等学校優勝野球大会に晴れて出場

その第一戦が、先年、テレビや新聞紙上で「鳥取中学

鹿田一郎投手、歴史的

球を投ず」と紹介された。

八月十八日午前八時三十分のことである。この年の予選参加校七十三校、全国大会出場校は十校であった。

翌々年から全国大会は鳴尾球場で行われることになり、わが校は和歌山中学に次ぐ出場回数を誇るまでに

なった。

大正初期から昭和中期までの予選大会は山陰大会として鳥根・鳥取両県の出場校で争われた。鳥根側では

許楽中(大社高)、松江中

高)、育英中(育英高)などが参加した。

当初、全国の予選参加校は僅かに七十三校であったが、逐次増加して、私の在

校から感じる次第である。私の在学時、部員は僅か十数名、入学時、「稲穂流

れて西に飛び、沈滞のとし幾とせせ」と、応援歌にも

美多賀賀鼻、上村両氏が優勝

# 二十六会員が参加 囲碁大会で

毎年恒例となっている鳥城会囲碁大会が今年も七月十五日、日本棋院会館「洗心の間」に、会員二十六名を集めて盛況に行われた。午前十一時、渡辺会長の挨拶をいただき、直ちに試合を開始し、夕刻まで熱心にかつ和気あいあいと鳥鷹(うろ)を争った。

結果は  
 ◇A組(二段以上)▽優勝 美多賀賀鼻秀輝三段(西高8回)▽準優勝 浅尾弘六段

鳥城会の囲碁大会に参加された方々は、いずれも功なり名を残された方で、それぞれに大人の風格があり、しかもどこかに鳥取県民性の長所である実直で義理堅く、人間の暖かさを残された個性豊かな人達でした。

## 囲碁大会に優勝して

囲碁は勝ち負けを争う世界です。その理論を厳しく詰めれば一つであるはずなのに、この大会では盤面に表現される打ち手の個性の豊かき、面白さに見応えがありました。

この大会に私も三段の資格で参加し、思いもかけず優勝させていただきました。囲碁、将棋など勝敗を争うゲームは、ある意味では相手の弱みにつけ込んで、これでもか、

これでもか弱者を追い込んでいく、いわば「弱者いじめ」のゲームとも受け取ることが出来ます。このこゝとは、「強き」をくじき、「弱き」を助けるという道理に反している。勝利を得た時には、いつもこの二律背反に思い悩んでいます。

囲碁は右脳の強化に役立つといわれます。記憶力の強化、バランス感覚の養成等に最適であり、さらに囲碁の楽しさ、人的つながりの拡大等、囲碁を打つことの効用をあげればきりがありません。

私は囲碁をライフワークの一つとして、終生打ち続けたいと決心しています。(建築サーブیس専務)

なお、大会の運営にご協力いただいた関係各位および賞品を寄贈していただいた(幹事 浅尾弘、大西一郎 西高4回)

## 無念「三敗一分け」

対合月士口・定定期囲碁其行戦戦

(一中61回) ◇B組(初段以下)▽優勝 上村明初段(東京事務所長)▽準優勝 富山初段(一中44回)

囲碁大会も年々参加者が増え、盛会になってきたのは喜ばしいことで、この傾向が層拡大されるように期待している。

鳥城会と鳴水会(倉吉中学・倉吉東高同窓会)の第四回対抗囲碁大会が昨年十月四日、日本棋院会館で開催された。

鳥城会から谷尾栄七段、田中丈夫六段、香月殿五段ら十三名が、鳴水会からも十三名の代表選手が参加、母校の名譽をかけて熱戦を展開した。

しかし、鳴水会側にはアマ囲碁元代表という田熊秀行七段をはじめ早川倫丈五段、野田昭人四段ら強豪がそろっており、結局、鳴水会が九勝四敗という圧倒的な差で勝ち、鳥城会側はまたも涙を呑んだ。

試合終了後、両チームは親睦の輪をひろげ、いろいろな賞品を手に入れた。

この大会は当初、懇親囲碁会として発足したが、第三回から、鳥城会渡辺誠毅会長から寄贈された「渡辺杯」争奪戦として定期化された。

鳥城会にとっては、通算で「零勝三敗一分け」の戦績はいかにも無念であり、今後の奮起が望まれるところである。(幹事・林田 連郎記)

## 期別の活動を拝見

前号に引き続き、卒業年次別の同窓会の動きを紹介します。

### 漢語校歌に 往時を偲ぶ

鳥取一中を昭和十九年に卒業した「第56回生」のうち、現在いわゆる関東地区に居住する者は二十四名であり、その約半数が毎年、顔を合わせて旧交を温めている。さすがに「古希」の声が始まり始めると、なにくれとなく身体的な支障を訴える者が増えて、せいぜい半数も集まれば「良し」

とせざるを得ないのが実情である。

本年も会合の直前に一名が鬼籍(交通事故であった)が入って、名簿から消えて行った。席上、ひとしきり「あと何年生きられるか」とか「あと何回、この会合が・・」といった話題が飛び交った。

実は、この会合は昨年までは新年会を兼ねて一月早々の夕刻から夜にかけて行われていた。だが、「お互いに現役を退くとか、まだ現役についても勤務状態に融

合は長持ちさせたいものだ」と念すること切である。(関東同窓会昨年度幹事・高田 統)

サロンの「初出演」で開かれた。既自慢十名が熱戦を展開し、田中雄六段が優勝、次回十二月の大会を約して散会した。

(追伸) 皆さんの絶大なる支援にもかかわらず、先の選挙で惜しくも次点に立いた前参院議員・農林政務次官吉田達男(西高5回生)君は、鳥取市内に政経事務所を構え、次期に備えて元気に活動しています。御礼とともに報告まで。(幹事・香月 殿)

## 独自に 囲碁会活動

西高5回生を中心とした囲碁会(名称・久松会)が十月六日、西新宿の「囲碁母校背負って

## 文春に初出演

「文武両道を往く名門鳥取西高(旧制鳥取一中)が我々の母校である・・」

こんな書き出しの記事とともに、西高5回(昭和十九年卒業)の在京有志が、月刊総合雑誌「文芸春秋」五月号に登場した。

同誌グラフィック・ページにある「同級生交歓」欄のこと。富士通常務・香月殿、日立コンピュータエレック・トロニクス社長・上山哲郎、西武建設専務・岸田勝実、参院議員(当時)・吉田達男、筑波大学教授・上田逸夫、プロ野球横濱ベイスターズ役員・益田貢、イラストレーター・毛利彰、林田ビル管理社長・林田連郎の

八氏。鳥取一中・西高のグループで同欄への出演は初めてという。

これもわが同窓(西高6回)の文芸春秋社取締役・編集総局長岡崎満義氏の高配によるものであることを付記します。(林田記)

通が利く立場になった。好んで寒い季節の夜間に集まるようなことは止そうでは「ないか」ということになり、今年から桜の盛りも過ぎた四月半ばの日中の会合に変更した。卒業以来、半世紀余をそれぞれ異なった分野で生き抜いて今日を迎えた面々とおあって、集まれば相対に幅広い話題と人生経験が披露され、予定の時間なびアツという間に過ぎ去る感じである。

毎回、交歓また尽きぬうちに、幹事役から「そろそろ

◇発行所 鳥城会事務局 西03・3442・2221

◇発行責任者 中野 純(副会長)

◇編集委員会 川口 義男(一中58回) 横山 豊(一中61回) 林田 連郎(西5回) 三浦 三郎(事務局長) 三角 幸子(西15回)